# 年間第 28 主日　10 月 10 日　分かち合い

## 後の世では永遠のいのちを受ける　　マルコ 10-30

イエスのエルサレムへの旅がいよいよ終わりに近づくと、イエスの深い思いが、一層激しく語られるようになる。「永遠の命を受け継ぐ」とか、「神の国に入る」とか、言うことはどういうことなのか。現代に生きる人間にも、簡単に理解できるものではないが、イエスの時代に生きた人々にとっても、決して明解ではなかったようだ。

ある人がイエスに近づいて尋ねる、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と。律法を守り、神に忠実に生きてきた人であろう。ファリサイ派の人とは異なり、正直にイエスに問う。イエスの答えは、当時のユダヤ人にとって、当然のような答え、「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな」等。十戒に掲げられた、最も基本的な掟。男は、そんなことなら、子どもの頃からずっと守ってきた、と答える。イエスは、「彼を見つめ、慈しんで言われた。『あなたに欠けているものが一つある。行って持っているものを売り払い、貧しい人々に施しなさい。・・・それから、わたしに従いなさい』と。

イエスは、掟を守ることを否定しないが、それがすべてではない、それ以上に大事なことがある、と言われたのだろうか。しかし、その男は、「その言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った」、とある。イエスから愛の招きを受け、それに応える道を教えられたにも拘わらず、その男はイエスに従うことを拒んだ。「たくさんの財産をもっていたから」とマルコは記す。たくさんの財産を持っている人間は、容易にそれを手放すことが出来ない。大金持ちであれば、相当の寄付をしても、何の痛みも感じない。むしろ、大口の寄付はその人の栄誉であり、もう一つの財産になるのだろう。かえって、そこそこの財産をもっている人にとって、手放すことは難しいのかもしれない。

そして、イエスは言われる、「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」。さらに、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と。

この少々大げさなたとえをもって、イエスは何を言おうとされたのだろうか。「持っている物を売り払って、貧しい人に施せ」という言葉は、とかく、恵まれな人々への慈善の行為、と受け止めがちだが、実は、貧しい人々への善行というよりも、自分自身にとって、神の国に入るための絶対条件として、課せられる行為ととるべきではないだろうか。「神の国に入る」と言うことは、自分が持っているものにさらに加えられる何かではなく、持っている物をすべて手放すことによって、はじめて与えられる恵みなのである。しかし、人間は思い違いをする。人間は価値あるものを自分の手に入れるために、あらゆる努力をし、持てる私財を投じることも厭わない。しかし、本当に価値あるもの、永遠の命、神の国に入るために、自分の持てる最も尊いものを手放そうとはしない。イエスは、まさに、そのような自分の最高の宝を手放すときに、はじめて最高の価値を手に入れることが出来るということを教えておられるのではないか。

それは難しいこと、神の力、恵みなしに、人間の努力だけで成し遂げることができないものであることを、イエスは教えておられるのだ。

ペトロは、「わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と誇らしげに言う。果たして、ペトロは、その時点で、自分がすべてを捨てるということの意味を悟っていただろうか。ペトロが、それを悟ったのは、主の受難の折に、三度までも主を否み、にも拘わらず、復活されたイエスから、神の民を牧する大きな使命をいただき、聖霊を受けて、宣教に派遣されてからではなかったか。わたしたちも、神の国に入れていただくために、永遠の命を受け継ぐために、イエスに従うために、どれだけ自分を捨てて生きなければならないか、様々な経験を通し、人との出会いを通して、悟る恵みを祈ろう。（S.T.）